

心に刻んで、誇り高く、人間くさく、前進していきましょう

10月22日開催の東海私大教連第47回大会に、日本私大教連の野中委員長からあたたかい連帯メッセージをいただきました。以下に掲載します。是非ともご覧下さい。私たちが、心に刻んで教職員組合運動に尽力すべき課題についての言及があります。

東海私大教連第47回大会に対するメッセージ

日々、学生の勉学条件の向上、教職員の地位、生活条件の向上、大学の民主化、権利侵害との闘いなどに奮闘をいただき、ありがとうございます。日本私大教連中央執行委員会を代表して、お祝いと連帯の挨拶を申し上げます。

先日、朝日新聞が、私大助成の経常費に占める割合が、ついに1割を下回ったと報じました。5割助成を上限とするとして私学振興助成法が施行されてから、40年を超えました。法律が掲げた理念、目標が、これほどまでに現実とかけ離れてしまった例は、他にあまりないのではないのでしょうか。

細る一方の私大助成は、学生の就学条件の悪化となって跳ね返ってきています。私大経営を存続するために、高い学費は当然のようになり、経済的な困難をかかえる学生に対する学費減免事業も限られた規模でしか行うことはできません。経済的理由で、退学する学生は増えています。

身近な学生たちの会話でも「奨学金の返済は、どれくらい?」「僕は700万円」「私は400万円」、これが当たり前の風景となりました。なかには有利子奨学金を受けている学生もいます。学生支援機構の有利子奨学金のキャッチフレーズは「希望21プラン」でした。どこに希望があるのでしょうか。改めて「将来不安21」だったなと、過酷な現実に嘆息をつくばかりです。

教育、研究の場はどうでしょう。学校教育法改正後、教授会がないがしろにされ、学部長選挙や学長選挙など民主的な手続きや制度が軽視されている大学が、増えているようです。解雇権の濫用、人権無視の経営私物化理事会も後をたちません。

職場はどうでしょう。学生獲得のための業務は増加の一途です。加えて外部資金獲得に関わる業務は、年毎に変更があり、振り回されています。施設使用料の獲得やエクステンション事業の業務が増えて、大学の教育研究や学生支援の業務はやせ細っていくばかりです。仕事に対する評価制度の導入や雇用形態の多様化は、職場に多くの不条理と軋轢をもたらしています。

先日、ノーベル生理学・医学賞を受賞することが決まった大隅良典氏は、「科学は、どこにいづくかがわからないから面白い」と話して、基礎研究の軽視、成果主義を批判しました。入試と就職だけを自己目的化して、中心にあるはずの学問研究や基本的な教育が軽視されています。大学が大学らしさを失いがちな今、大学らしさを取り戻すために、担い手である教職員組合の活動が重要になっています。

教職員組合の活動といっても、特に大それたことではありません。教職員に要求を旺盛に表明してもらい、声をまとめてもらうこと。職場からの議論をまきおこしてもらうこと。分断されがちな人間関係を回復すること。これらを背に、団体交渉を粘り強く行っていくこと。たくさんの仲間を増やすこと。組合活動の範囲を限らないこと。平和や憲法がほんとうに危なくなっています。大学にふさわしく社会に目をむける問題もぜひ取り上げてください。こうしたことの積み上げは、不条理を許さず、大学が大学として、息をふき返すために、どうしても必要なことです。

私たちは、私立大学という、若者や学問・科学の未来にとって、大切な場所で、働いています。このことを教職員組合として、心に刻んで、誇り高く、人間くさく、前進していこうではありませんか。日本私大教連は、東海の仲間と心をつなげていくことをお誓いして、お祝いと連帯の挨拶とさせていただきます。大会のご成功をお祈り申し上げます。



2016年10月22日

日本私大教連中央執行委員長 野中郁江